

「役割語」からみた日本語の「多様性」

金水 敏(大阪大学)

突然ですが、日本語には、何種類あると思いますか？書き言葉を入れると話がややこしいので、話し言葉に限りましょう。

「何種類」って、日本語はたった一つしかない、と思う方もいらっしゃるでしょうね。その時頭に思い浮かべられるのは、NHKのアナウンサーが話すような、いわゆる「標準語」（あるいは「共通語」）ではないでしょうか。いや、もう少し詳しく言うと、正しい（整った、美しい）日本語＝標準語と、正しくない（誤った、崩れた、きたない）日本語の 2 種類がある、という方もいらっしゃるでしょう。

一方で、標準語は一部の人の日本語でしかなくて、多くの日本人は方言を話している、方言だって立派な日本語だ、という意見もあるかと思えます。しかし、方言となると、自分自身や身の回りの方々の方言はある程度分かっている、日本にどれくらいの方言があって、またその現状がどのようなものであるかという、専門家でもない限り、ぼんやりとした知識しかないのが普通です。方言のような地域的差異だけでなく、男の言葉と女の言葉だって違っているし、世代によっても違っていると気付く方もいらっしゃると思います。自分自身の言葉と、自分の親の言葉と、自分の子供や教え子の言葉が微妙に、あるいはかなり違っていると感ずることも稀ではないでしょう（例えば、「見れる」「起きれる」「考えれる」等の、「らぬき言葉」を使うか使わないか、など）。

このように、日本語の「多様性」について考えを巡らせていくと、私たちの知識というのは、案外ぼんやりとしてはっきりしないものだということが分かってきます。それもそのはず、現実の言語というものは、絶えず流動し、揺らいでいるものであり、その実態や多様性を正確に把握することは、言語学の専門家にとっても、大変難しいことなのです。むしろ、ちゃんとした専門家であるほど、「日本語とはこういう言語だ」と言い切ることに慎重である、と思います（cf 真田信治・庄司博史（編）『事典 日本が多言語社会』岩波書店、二〇〇五）。

さて、日本語の多様性ということについて、少し違った角度から眺めてみましょう。次のような例をご覧ください。

- (1) そうじゃ、わしが知っておるのじゃ。
- (2) そうよ、あたしが知ってるわ。
- (3) そや、わいが知っとるんやでえ。
- (4) 左様、拙者が存じておるのじゃ。
- (5) そうですわ、私が存じておりますのよ。
- (6) そうあるよ、ワタシが知ってるアルよ。
- (7) そうだ、おれが知っているんだ。

(8) そうさ、僕がしってるのさ。

(9) んだ、おらが知ってるだ。

これら(1)～(9)の発話は、すべて概ね同じ内容を伝えています、そのスタイルは随分こととなります。しかも、いずれの発話も、その発話者のイメージが鮮明に想起されるのではないのでしょうか。例えば、(1)ならば、男性の老人。「村の長老」「魔法使いのおじいさん」「博士」等をイメージされるかもしれません。(2)は、女性(年齢は、ぶれがありそうです)。(3)は、大阪、あるいは広く関西の男性。(4)は、武士(戦国時代、あるいは江戸時代)。(5)は、女性ですが、かなり上品で高貴なイメージがあると思います。「お嬢様」「奥様」「お姫様」「セレブ」などのイメージです。(6)は、中国人が話す片言日本語のようですね。(7)(8)はともに男性でしょうが、(7)が「男臭い」印象を与えるのに対し、(8)は子供っぽい印象を与えます。(9)は、田舎の男性(農民、漁民、猟師、木こりなど)のように感じられるでしょう。

以上の発話者のイメージは、私を感じたところを述べたものですが、多少のぶれはあっても、概ね読者のみなさんにも共有していただいたのではないのでしょうか。例えば(1)～(9)の話し方は、テレビドラマ、アニメ、漫画等によく現れますが、その話者は右に書いた人物像にぴったり当てはまります(例えば、(1)の話し方と、「名探偵コナン」の阿笠博士)。このことは、話し方のスタイルと話者の人物像との結びつきが多くを受け手に共有されていることを雄弁に物語っています。

ここから、次の2点のことが浮かび上がってきます。

- ある種の日本語の話し方(スタイル)は、その話し手として、特定の人物像を想起させる力がある。
- 上の、発話スタイルと人物像の結びつきは、日本語話者の間で、かなりの程度共有されている。

私は、このような力を持つ発話スタイルのことを**役割語**と名づけ、そのヴァリエーション、理論的背景、歴史的起源等について一冊の本にまとめました(『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店、二〇〇三年)。ここで強調したいのは、役割語における発話スタイルと人物像の結びつきは、現実そのものではなく、むしろ心理的・想像的なものである、という点です。例えば(1)のようにしゃべる老人は、本当にいるのでしょうか。ちなみに、(1)に似た方言はありますが(例えば岡山など)、方言は年齢とは直接関係しないので、方言の面(だけ)から(1)が老人の言葉に聞こえる理由を説明することはできません。そもそも、フィクションの中で、(1)のような話し方をする老人は、むしろ方言話者として位置づけられないことの方が多いのです。

では、年齢によって、人は話し方が変わるのでしょうか。若い頃普通に話していた人が、年を取ると老人語を話し始める、というのは、よく考えると奇妙な話です(マンガでは、そのような例を見つけることができます)。つまり、(1)のような「老人語」は、現実の老人の話し方とは直接の関係を持っていないのです。にも関わらず、多くの日本語話者が、(1)の話し方に「老人らしさ」を感じ取ることができるというのは、大変不思議なことと言える

でしょう。これは、最初に書いたように、私たちが日本語の多様性の実態について、知っているようで案外知らないという事実と、鮮やかな対照をなします（なお、(1)のような老人語の起源については、拙著『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』をご参照下さい）。

(1)以外についても、状況は実は同じです。(2)と(5)、(7)と(8)がそれぞれ女性と男性の話し方であり、それぞれ性格や境遇が違っているように感じられるとして、そういった人物があなたの回りにいるのでしょうか。あなたは、(6)のように話す外国人に、本当に会ったことがあるのでしょうか。また(9)のような話し方に、あなたはいったいどこで出会ったのでしょうか。そしてそもそも、現実の生活の中で、私たちは(4)のようにしゃべる武士に出会っているはずがないですね。結論から言えば、私たちは現実世界から、(1)～(9)のような話し方とそれに対応する人物像の結びつきを学ぶのではなく、むしろ幼少期から接してきた、絵本、童話、マンガ、アニメ、ドラマ等の作品から、最初からフィクショナルな表現として学んだと考える方が、筋が通ります。つまり私たちは、現実の日常生活からよりも、マスメディアに流されるフィクション作品から、日本語の多様性に関する情報を多く受け取っている、ということになります。

それでは翻って、なぜフィクション作品には、(1)～(9)に例示されるような「役割語」がもちいられるのでしょうか。そのことについて、山口治彦さん(神戸市外国語大学教授)が「巨視的コミュニケーション」という概念を用いて、うまく説明しています（「役割語の個別性と普遍性―日英の対照を通して―」『役割語研究の地平』くろしお出版、近刊）。山口氏は、作品の中で、ある登場人物が他の登場人物に対してセリフを話すというコミュニケーションのあり方を「微視的コミュニケーション」と呼び、作品の作者がその受け手に対してメッセージが伝えられることを「巨視的コミュニケーション」と呼んでいます。ドラマやマンガなどでは、しばしば登場人物のセリフに、異様に説明的なものがありますが、それは微視的コミュニケーションを通じて巨視的コミュニケーションが遂行されていると見なすことができるのです。簡単に図示すると、次のようになります。

(10) [B 作者 → [A 登場人物 1 → 登場人物 2] → 受け手]

ここで、A として示されたのが微視的コミュニケーション、その外側にある B として示されたものが巨視的コミュニケーションで、A に B が重ね合わされることがあるわけです。そして、役割語もまた、このような微視的コミュニケーションと巨視的コミュニケーションの重ね合わせと説明することができます。つまり登場人物のセリフのスタイルを介して、その人物の人となりや性格を、端的に、直感的に受け手に伝えているのです。このようなことが可能になるのは、既に述べたように、作者と不特定の受け手との間で、発話スタイルと発話者の人物像との組み合わせについての知識が共有されているからに他なりません。

ここまで考えてくると、ひょっとしてここで述べている事柄は、フィクションの中の話だけではない、日常生活の、普通の会話の中でも同じようなことが起こっているのではないか、と思われてきます。つまり、自分自身の発話スタイルをコントロールすることによって、自分がどんな人物であるかということを知り手に知らせる、ということが、日常生

活の中でもあるのではないのでしょうか。例えば、普段、ほとんど男性と同じような話し方をしている若い女性（「これ、うめーな」「早くしろよ」など）が最近多くなってきていますが、そういう女性でも時々、「女らしく」振る舞いたいと思う時があって、そんな時に「これ、おいしいわね」「早くしてちょうだい」などと、女性的なことば遣いをする、というような場合の話です。あるいは、普段自分のことを、「おれ」と言っている男性が、相手や状況に応じて「ぼく」と言ったり「わたし」と言ったりする場面にはよく遭遇しますが、これも似た現象でしょう。小林隆さん(東北大学教授)は、方言の運用の仕方について、同様の現象を指摘しています。つまり日常的にほとんど共通語で話している人が、地元の人とうち解けた雰囲気話したいとき、方言を用いる、というような事柄です（「方言の二〇世紀」『日本語学会二〇〇七年度春季大会予稿集』）。これを小林氏は、ファッションに喩えて、「共通語服」と「方言服」を着替えたり、あるいはアクセサリのように「方言」を見に飾ったりすることとして説明しています。

このように、日常の自分自身の発話スタイルをコントロールすることによって自己イメージを調整する行為を、(10)を少し変えて図式化すると、次のようになるでしょう。

(11) [B 話し手→ [A 話し手→聞き手] →聞き手]

この場合、Aにおける話し手とBにおける話し手、Aにおける聞き手とBにおける聞き手はそれぞれ同一人物なのですが、AとBでは、話し手がやっている事柄が違うわけです。こういう、コミュニケーションの多重化とも言うべき現象は、日常において常に起こっているのではないにしても、決して稀ではないと考えられます。その際用いられる知識は、フィクションにおける役割語の知識と決して別物ではない、というより、まったく同じものと見るべきでしょう（ただし、(1)のような老人語や、(4)のような武士語、(6)のような「中国人」風訛りを日常生活で用いると、ふざけたりおどけたりしているように聞こえるわけですが、「まとも」に聞こえるか、聞こえないかは、そのスタイルと日常生活で出会うシチュエーションとのマッチングによります）。

以上見てきたように、役割語の概念は、日本語の「多様性」に関する一つの見方を提供してくれます。それはフィクションにおけるキャラクター表現のみならず、日常生活の会話の中での、自己イメージ形成にも関わる問題であったわけです。今、私を始め何人もの研究者の方が、役割語という新しい観点から、日本語（そして世界の言語）の性質について研究を進めつつあります。今後とも、その成果にぜひご注目下さい！

※役割語に関する情報を集めたブログがあります。

「SKの役割語研究所」 <http://skinsui.cocolog-nifty.com/sklab/>